



蘇る、蒲生の自然

蒲生干潟と海浜

9月号

青と緑が映える蒲生干潟と海浜 (8月上旬の蒲生)



快晴の日には、空と海の青と海浜の緑の二色が美しく映えます。特に、干潟周辺にはハママツナが広く生えて、目にするだけで気分がそう快になります。

ハママツナの群落からの眺め①



ハママツナの群落からの360°の眺めです。緑の絨毯の上にいるようです。満潮時には海水に浸る所があります。宮城県より南の太平洋岸に広がっているそうです。



ハマツナの群落からの眺め②



ここに 10mほどの高さの津波が押し寄せてきました。それから 10 年後の今、緑が生い茂る海浜となりました。青と緑のコントラストが美しいです。



8月号で名前が分からない植物を2つ紹介しました。その植物名が分かりました。それは、スリーエム仙台市科学館のHP上に公開されている「蒲生干潟レポート」の「蒲生干潟の植物」で報告されていました。



北アメリカ原産の帰化植物。
道端や荒地に生える雑草。



メマツヨイグサ

蒲生干潟レポート
第 269 号より



北アメリカ原産の帰化植物。

海岸砂地に生える。1982年新潟県
村上市で初めて確認される。



オニハマダイコン

蒲生干潟レポート
第 265 号より



スリーエム仙台市科学館の「蒲生干潟レポート」で2つの植物名は分かりましたが、疑問に思うことがありましたのでメールで質問してみました。

- ① 蒲生海浜のメマツヨイグサとオニハマダイコンは北米原産の帰化植物です。それらは、震災以前から生えていたのでしょうか、それとも震災後に生えてきたのでしょうか。

今年4月に赴任したばかりで、私も4月からの調査しか行っておりませんが、館にある資料等を参考にし、答えられる範囲でお答え致します。

メマツヨイグサについては、震災前の生育状況については把握できておりません。また、オニハマダイコンについては、小学校4年生以上に配布されている「仙台の自然」という副読本の中に「元々日本にいないオニハマダイコンが見られるようになった」という記載があります。おそらく震災前では見られなかったのかもしれませんが、本当のところは分かりません。それ以外にも、海浜植物でないブタナなども見られていることから、**今見られる植物**について考えられることは以下の4つのことが考えられます。



- ① 元々蒲生に自生していて、震災後にも種子が残っていた。
- ② 津波によって、外洋からもしくは陸地から種子等が運ばれてきた。
- ③ 蒲生を訪れる多くの鳥たちが運んできた。
- ④ 工事車両が他の地域の砂礫とともに運んできた。



- ② オニハマダイコンの群落は導流堤を渡った海浜にあります。その海浜は砂浜というより砂礫を含んだ浜でした。何となく「コアジサシ」の繁殖地として人工的に築いた浜のように思います。オニハマダイコンの群落と関係があるのではないのでしょうか。

蒲生干潟の導流堤を渡ったところの海浜については、コアジサシの繁殖地として人工的に築いたかどうかは把握しておりません。ただ、オニハマダイコン群落のとなりにオカヒジキの群落も見られるようになりました。このエリアには、**海浜植物以外の植物も見られるので、今後も注視**しているところです。



素朴な疑問にも丁寧に分かりやすく回答していただきました。科学館では、毎月蒲生干潟の植物だけでなく生物や地形の観察も実施して「蒲生干潟レポート」に、その成果を公表しています。それを頼りにこれからも、蒲生干潟を訪ねていきます。蒲生干潟を正しく理解するとともに、「おやっ？」と思うことに役立てていきたいです。上記は8/11の質問、回答。

7月24日のオニハマダイコンの群落



オニハマダイコンが早くも枯れてきました！

8月20日のオニハマダイコンの群落



オカヒジキの群落です。
日本では、日当たりの良い海岸の砂浜に生育するそうです。東北地方では昔から、食用とされていました。



オカヒジキの群落



WEB 画像より



ポツンと生える一本の松

広い海浜にポツンと生える一本のクロマツ。陸地のクロマツ林の松ぼっくりが、津波でここまで運ばれてきたのでしょうか？

初めて見る花です。近くに3つ生えていました。

科学館に問い合わせるとウンラン（海浜植物）と教えていただきました。群生していてつぼみが多くあるので、これから満開になるそうです。

来月が楽しみです。



ウンラン (8~10月)

七北田川の中州で羽を休めるウミネコとある種の水鳥



南蒲生浄化センター

七北田川の中州

繁殖地の前のフェンスに佇むヒバリ



繁殖地の上の美空を舞い飛ぶヒバリ



ヒバリです！



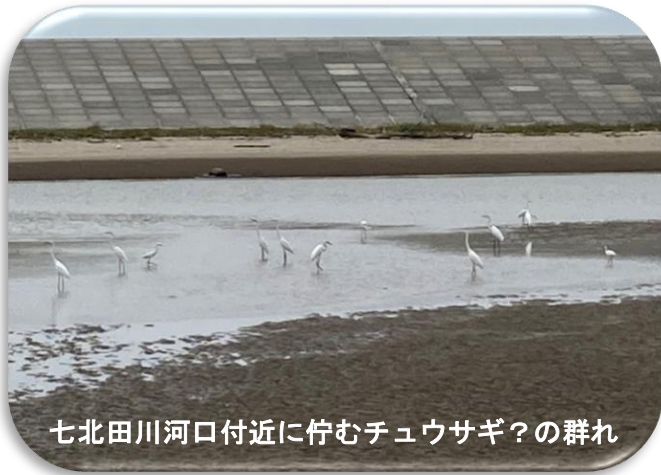
WEB 画像より



防潮堤前（陸地側）のヒバリの繁殖地



WEB 画像より



七北田川河口付近に佇むチュウサギ?の群れ



餌にありつけないカモメの若鳥

雛鳥の時には親鳥からの口移し。
若鳥になると自力で? **厳しい自然の掟!**



8/27 撮影



ゴイサギの巣

8/27 撮影

チュウサギ?は、30羽ほどしかいませんでした。どこへ?



ゴイサギは、1羽もいませんでした。どこへ?



③ キリンビール仙台工場の敷地内の林にサギのコロニーを見つけました。震災前は学区内の屋敷林がコロニーだったようです。サギの雛も幼鳥、若鳥となり、そこには目算ですが300羽ほどの白鷺(チュウサギ?)が生息しています。渡り鳥ならあまり心配しませんが、留鳥であれば異常繁殖ではないかと心配しています。どうでしょうか。

サギについては、種類によって留鳥なのか漂鳥なのか異なりますので、サギの種類によって状況が異なるかと思います。チュウサギであれば漂鳥ですのであまり心配しなくても良いのではないかと思います。また、自然のことですので、長い目で見れば個体数が落ち着いていくものと思われる。継続的にようすを見守るのが良いのではないかと思います。



漂鳥(ひょうちょう)とは、暑さ、寒さを避けるため、夏は山地、冬は平地、と言うように繁殖地と越冬地を区別して日本国内を季節移動する鳥だそうです。上記は8/11の質問、回答です。8/27には激減していましたので、どこかへ移動したのでしょうか?
移動したとすると、この白鷺は漂鳥でチュウサギなのでしょうかね?